

第三章

未開（狩猟）段階の略述——牧畜段階、すなわちローマ帝国を席卷した蛮族の諸部族——
生存手段に対する人口増殖力の優越——北方諸民族の大移動の原因

まず狩猟社会の要点を簡潔に述べ、そのうえで牧畜社会の特徴を踏まえつつ、古代ローマ帝国に流入して帝国を圧倒するに至った蛮族諸部族の動向と実像を示す。同時に、人口増加が食料など生存資源の供給や地域の扶養力を上回った事実を確かめ、それが北方からの大規模移住、すなわち大移動を招いた要因であったことを明らかにする。

狩猟が主な生業であり、食料を得る唯一の手段でもあった最初期の段階では、食料が広く散在するため、人口密度は必然的に低いと考えられる。北米先住民については、男女の性的衝動が他民族より弱いとされることもあるが、それでも人口を増やそうとする力は、常に生存手段の供給力を上回りがちだ。実際、部族が肥沃な土地に定住し、狩猟よりも豊かな食料源に依存すると、人口は比較的速く増加する。さらに、先住民の家族

が欧州人の居住地の近くに移り住み、より楽で文明的な暮らしに移行すると、一人の女性性が五、六人、あるいはそれ以上の子を育て上げる例も少なくない。これに対し、荒野の暮らしを続けられ、成人に達するのは一家で一、二人にとどまることも珍しくない。同様の傾向はケープ地方のコイコイ（旧称ホットtentott）にも見られる。以上は、狩猟民社会では人口増の力が生存手段の供給をしのぎ、その力は自由に働ける環境が整うやいなや顕在化することを示している。

検証すべきは、この力を道徳的墮落や不幸を招くことなく適切に制御し、その影響や帰結を生存手段に見合う水準に保てるかどうかである。

私は、北米の先住民社会は全体として自由で平等とは言いがたいと考える。また、当時の記録や、同時代に「未開」とされた他社会に関する報告でも、女性は文明国における貧者が富者に従う場合以上に、男性に強く隷属させられていたと記される。人口の半分が残りの半分のためにヘロットのように働かされ、人口抑制に伴う不幸は常に社会の最下層に集中する。幼年期には手厚い世話が要るが、女性は頻繁な移動と、粗暴な男たちのための絶えざる雑役に縛られ、子どもに必要な注意を十分に払えない。過重な労働は妊娠中も子を背負う時も続き、流産を増やし、頑健な子ども以外は育ちにくくなる。

さらに戦争が絶えず、老いて弱った親を見捨てざるを得ない場面も生じ、自然な情に反する圧力がかかって社会全体から不幸の影は消えない。ゆえに、こうした社会の幸福を見積もる際には、壮年の戦士だけを見てはならない。彼は百人に一人の幸運な存在で、いわば資力ある紳士に当たり、幼少から成人まで無数の危難をくぐり抜けて生き延びた人物である。二つの社会を比べるなら、対応する階層同士を照らし合わせるのが筋であり、この観点では壮年の戦士は紳士層と、女性や子どもや高齢者は文明国の共同体の下層と比べるべきだ。

以上の検討（正確には狩猟民の記録にもとづく検討）から、公正に見れば、狩猟民の人口が希薄なのは食料不足が原因であり、食料が潤沢になれば直ちに増えるといえる。さらに、狩猟社会で悪徳の影響を除けば、人口を生活手段に見合う水準に抑える主たる歯止めは窮乏である。観察と経験から、この歯止めは地域的・一時的な少数の例外を除き、いまもほぼすべての狩猟社会で持続的に働いていることが分かる。理論的にも、この抑制は千年前とほぼ同じ強さで働き、千年後にその強さが大きく増すとは考えにくい。遊牧民が優位だった社会の風俗や習慣は、歴史のより進んだ段階に属するとされつつ、なお不明点が多い。それでも、欧州をはじめ豊かな地域の歴史を見れば、食料不足に伴

う苦難が避けがたかったことは明らかである。欠乏はスキタイの牧人を故郷から駆り立て、その圧力のもとで北半球各地の諸部族が群れをなして動いた。行軍が進むほど不安と恐怖は募り、合流した軍勢はついにイタリアの陽光をも覆い、世界を暗黒に沈めた。地上でも屈指の美しい地域に長く深く残った影響の根本原因は、人口増加が生存手段を上回ったという単純な事実に尽きる。

牧畜社会が耕作社会ほど多くの人口を養えないことは周知だが、牧畜民が恐れられ手ごわい存在と見なされるのは、共同体が総動員で一斉に移動でき、しかも家畜のための新たな牧草地を求めてその力を頻繁に用いざるを得ないからである。家畜という蓄えを持つ部族は直ちに食を確保でき、切羽詰まれば繁殖用の群れすら食用に回した。女性の負担は狩猟社会より軽く、男性は結束し、移動によって牧草を確保できるという自負があるため、家族を養う不安が小さい。こうした条件が重なって人口は自然に増え、移動は次第に頻繁かつ迅速になり、勢力圏はたえず広がり、周囲はいっそう荒れた。やがて弱い構成員は欠乏に苦しみ、多数を一塊のまま養い続けることは不可能だという現実が明白になる。この段階で母体から若枝が押し出され、新天地を求め、剣でよりよい居住地を勝ち取れと促される。「世界はすべて彼らの前にあり、どこを選ぶかは彼らの手に

ある」。苦境への焦りと将来への期待、骨太な進取の気性に突き動かされた彼らは強敵となり、彼らが殺到した土地の平和な住民は、これほど強い動機に支えられた勢いに長く抗しきれなかった。同類の部族と対峙すれば命がけの争いとなり、敗北すれば死に、勝てば生き延びるという自覚が、捨て身の奮戦を生んだ。

こうした苛烈な争いの過程で、多くの部族が実際に滅び、困窮や飢饉で命を落とした者も少なくなかった。他方、運に恵まれた部族は力を増し、より肥沃な地を求めて次々と新たな移住者を送り出した。住居と食糧をめぐる絶え間ない奪い合いで失われた命の総数を、移住の常態化で抑制が緩むことで生じた人口増の勢いが、なお上回っていた。

南へ移った部族は連戦の末に豊かな地域を得ると、増えた糧に支えられて人口と勢力を急速に伸ばした。やがて中国の辺境からバルト海沿岸に至る広い地域が、困難に鍛えられ、戦を好む勇敢で頑健かつ進取の気性に富む、当時「蛮族」と総称された多様な人々で満ちた。独立を保つ部族もいれば、首長のもとに結集して勝利を重ね、穀物や葡萄酒、油に恵まれた長年の悲願の地という大きな報いを得た集団もあった。アラリック、アッティラ、ジンギス・カンらとその周囲の首長には、栄誉や大規模な征服の名声を求めて戦った側面もあったが、北方からの大移動を駆り立て、ときに中国、ペルシア、イタリ

ア、さらにはエジプトへまで押しやった真の要因は、食糧の不足、すなわち扶養能力を超えた人口過剰であった。

領域内には不毛で生産力の低い土地が少なからずあり、当時の総人口は領域の規模のわりに伸びなかった。それでも世代交代はきわめて速く、戦争や飢饉で命が失われて人口が減るたび、そのたびにいつそう多くの子が生まれて減少分を埋めた。当時「蜚族」と呼ばれた人びとは、大胆で勇猛である一方、先を見通す力や計画性に乏しいと見なされた。そうした社会では、将来の困難を見越した出生抑制は近代国家ほど強く働かなかった。場所を変えれば暮らしや境遇を良くできるという期待や、継続的な略奪の見込み、困窮時に子どもを奴隷として売るという選択肢、さらに無頓着な気質が重なり、人口は増え続けて膨らみ、結局は飢饉や戦争で抑え込まれた。

牧畜社会では不平等が早い段階から現れ、生活条件の格差がやがて広がるなかで、食料不足の打撃は最も不遇な人びとにことさらに重くのしかかる。夫の不在中は不意の略奪にも遭いやすく、帰還を待ち望みながら幾たびも失望を味わう女性にも、その苦難はしばしば及んだ。

ただし、こうした人びとの実態に迫る詳細な歴史研究は十分に進んでおらず、食糧不

足の影響が主にどの層にどの程度、どの範囲に及んだのかも厳密には特定できない。とはいえ、牧畜社会に関する諸記録を総合すれば、概して次のように言える。移住などによって生計手段や資源が増えれば人口は増加し、さらにそれ以上の増加は不幸や困窮、さらには悪徳によって抑制され、人口は生計手段と均衡する水準にとどまる。

女性をめぐる有害で不健全な慣行や風習が一部に存在し広まっていたかどうかはともかく、戦争に踏み切りそれを遂行すること自体は許しがたい悪であり、その帰結が人びとの不幸と苦難であることは認めねばならない。とりわけ、食糧不足がもたらす惨状と苦しみは、誰も否定しえない明白な事実である。